なったのに対し、DMの70%が足の確認が不十分であった。皮膚科への受診動機は、非DMの72%が自分の意思によるものであったのに対し、DMの49%は医師の指示によるものであった。

【総括】 皮膚科を受診し足白癬と診断された患者を対象としたアンケートの結果、両群とも診断前の行動に有意差はなかったが、DMは診断後も適切な足の観察や処置が行われていない傾向を認めた。しかし、受診動機が医師の指示によるものが多いことから、診察時に足の観察や処置を促すことで適切な予防が期待できる。

P2-41.

Bevacizmab硝子体投与前後の前房内サイトカインの解析

（眼科学）
○阿川　毅、臼井　嘉彦、若林　美宏
奥貫　陽子、毛塚　剛司、竹内　大
山内　康行、後藤　浩

【目的】 近年、様々な虚血性網膜疾患の治療に対して抗血管内皮細胞増殖因子（VEGF）抗体であるbevacizmabの硝子体投与（IVB）が施行され、良好な成績を得ている。一方、IVB後の眼内における免疫動態は未だ明らかではない。今回、我々はIVB前後の前房内サイトカイン濃度を測定した。

【対象と方法】 加齢黄斑変性10例12眼、増殖糖尿病網膜症4例4眼を対象とした。IVB（1.25 mg/0.05 ml）施行前に、前房水の採取を行った。また、IVBの2日後に内眼手術を行い、手術直前に再度前房水を採取した。これらの前房水中における18種類のサイトカインおよびケモカイン濃度をフローサイトメトリー（cytometric bead array : CBAシステム）で測定した。

【結果】 IVBによりVEGFは126.6から41.3ng/mlと大きく減少した（p=0.02）。一方、interleukin（IL）-6は84.2から1,205.9 ng/ml（p=0.05）、IL-8は28.8から112.6 ng/ml（P=0.02）、macrophage inflammatory protein（MIP）-1β は8.9から62.9 ng/ml（p=0.05）、interferon-inducible protein（IP）-10は189.8から357.7 ng/ml（p=0.04）、monocyte chemotactic protein（MCP）-1は504.9から1,233.7 ng/ml（p=0.002）といずれもIVB前と比較して有意に上昇していた。

【考按および結論】 抗VEGF抗体の硝子体内投与により前房水中のVEGF濃度は低下したが、他の炎症性サイトカインおよびケモカインは上昇していた。抗VEGF抗体自体には抗炎症作用が知られているが、VEGFの低下により、眼内局所では反応性の炎症反応が出現する可能性がある。

P2-42.

前庭機能と人工内耳術後のめまい

（耳鼻咽喉科学）
○古瀬　寛子、萩原　晃、河野　淳
西山　信宏、小川　恭生、河口　幸江
鈴木　衛

【はじめに】 内耳障害によって生じた高度難聴例では前庭機能障害を合併することがある。また、人工内耳術後にめまいを訴える例も存在するため、術前の前庭機能の評価は重要である。今回、術前の前庭機能と術後のめまい症状との関係について検討した。

【対象】 2002年から2007年までに東京医科大学病院で人工内耳挿入術を行い、術前に前庭機能検査を行った成人症例47例を対象とした。

【方法】 術前の前庭機能は冷水によるカロリックテストと前庭誘発筋電図（VEMP）により評価した。術後の前庭機能障害はめまいの訴えと眼振で評価した。

カロリックテストは42例に、VEMPは36例に施行した。

【結果】 カロリックテストで19例45.2%に異常がみられ、VEMPでは16例44.4%が異常であった。

難聴の原因疾患は様々であったが、術前にめまい症状があったものは少なかった。

術後めまい感を訴えた症例は10例22.4%であり、ほとんどの症例でめまい感は術直後から発症していた。術前の前庭機能検査結果が正常な例と異常な例で、術後のめまい感を訴える例の割合はほぼ同等であった。

術後、眼振がみられた症例は11例で、そのうちめまい感を伴った症例は9例であった。眼振が出た症例では術前の前庭機能が保たれている症例が多かった。

【結論】 今回の結果では、術前のカロリック、